

大学におけるライフキャリア教育～男女共同参画の視点から

神奈川大学人間科学部 教授 荻野 佳代子

神奈川大学では、学生が男女共同参画の視点から人生の生き方、すなわちキャリアを考えるための「ライフキャリア教育」を実施してきた。「人生100歳時代」に向け社会が急速に変化するなか、現代の青年はこれまでのモデルに限らず広い視野で生き方をとらえ選択する必要がある。県人権男女共同参画課と連携しながら企画・実施してきた教育プログラムおよび正課授業の取り組みについて紹介するとともに、教育的効果やプログラムの改善、普及に向けた今後の課題についてまとめた。

1. はじめに

「人生100歳時代」を生きる上でこれから社会に出る大学生は、自らのキャリアをどのように考えていけばよいのだろうか。日々学生と接して感じるのは、大学生の将来展望は意外と短いということであり、このことは発達心理学の研究でも指摘されている。学生にとって就職はともかく、今後10年以内に訪れるかもしれない結婚、育児などを現実的に考えられないとしても不思議はない。さらに生き方のモデルが身近な親などに限られ、広い視野から将来を展望できない学生も多いように感じている。大切なことは「100歳時代」を迎えた社会は急速に変化をしており、これまでのモデルに限らず広い視野で生き方をとらえ選択していくことが必要ということである。

グラットンとスコットとの共著¹⁾において、長寿社会は健康に生き、働ける時間が長くなることでもあり、人生終盤の時期だけでなく人生全体を設計しなおす必要があると指摘している。特に職業・家庭生活においては、「男は仕事・女は家庭」といった伝統的固定的な家族形態はもはや適さず、家族やパートナーとの関係や役割を時々で柔軟に調整しつつ主体的に生き方を選択することが重要としている。

近年神奈川県では、女性の年齢階級別労働力率いわゆるM字カーブの落差が全国で最も大きいというデータが示され、背景に男性は長時間通勤・労働の一方女性は育児期に仕事との両立が困難で離職が多いことが指摘されている²⁾。しかし女性が働き続けるための制度や環境整備は急速に進んでおり、学生たちが社会に出てどのような働き方をするのか、具体的な就職活動に入る前に人生全体を見渡しつつ広い視野で考

えることが必要でありこれを目的としたのが「ライフキャリア教育」である。

2. ライフキャリア教育の取り組み

「ライフキャリア教育」とは「学生が卒業後を考えるうえで、仕事、結婚、育児、介護等のライフイベントを、性別によって役割を固定的に考えることなく、自分が望む働き方・生き方を選択できることをめざした教育」として、神奈川大学では県人権男女共同参画課と連携させて頂きながら行ってきたものである³⁾。

2012年度、本学では大学の男女共同参画事業を開始した時期に、県からの声かけを良い契機としてプログラムを作成、実施することとなった。企画・準備には半年ほどをかけ、県や市、NPOの方や学生も加わり、法学・社会学・心理学など多様な学問分野から話題を設定した。当初は昼休み全7回、自由参加の就職講座として開始した。その結果想定よりも多くの学生の参加があり、関心の高さに手ごたえを感じた。学生にとって「男は仕事・女は家庭」などの性役割に対する自らの考えや社会状況を確認し、自分の生き方・働き方に結びつけて考えることは新鮮かつ漠然とした将来への不安に向き合う機会になったようである。

2013年度以降は県人権男女共同参画課「ライフキャリア教育支援事業」との連携により、15回の半期正課プログラム³⁾の開発・実施、および2015年度にはライフキャリア教育かわモデル発信事業、「ライフキャリア道場」の開催等を行った。現在では、県のプログラムを本学に適した形にアレンジし、法学部、人間科学部2つの正課授業に位置づけて実施をしている。

授業では、学生たちが現在の社会状況などを客観的に把握できるようデータを示しながら解説し、また外部講師を招くなどにより多様な学問領域における知見を紹介し、幅広い視点や価値観に触れること、またグループワークなどを通じて自らの考えを表現し深める機会を作ることが心がけている。

受講した学生からは、以下のような声が聞かれている。

- ・「将来家事・育児に専念しようと思いましたが、働いて社会に参加する道もありました(2年・女)」
 - ・「自分が就活する時には、男性の育児休業制度があるのか、とれる環境なのかも考慮に入りたい(2年・男)」
 - ・「私は『男は仕事、女は家庭』という考えに賛成だ。しかしこの考えに執着しすぎるとパートナーを苦しめることになると思うようになった(3年・男)」
 - ・「性別による環境の差は当たり前すぎて、男女とも負担になりうることに気づきにくい。自分はどんな社会でどんな生き方をしたいのか考えることができた(2年・女)」
- なかには、「(望ましい生き方という様な)『ゴール』を示してほしいのではなく、『走り方』を教えてほしい」と言った学生がいたが、学生たちには、「働くべき」とか「結婚すべき」といった「型」にはめようとするのではなく、先の見えない社会に出ていく不安に寄り添い、困難を乗り越える知恵や自信をつけることが必要と感じている。

3. ライフキャリア教育の効果と課題

ライフキャリア教育の効果として、以下の三点を挙げることができる。一つには、「就職」、「結婚」、「育児」などを「漠然としたイメージ」や「夢」といったとらえ方から「現実のもの」、「自分の問題」であり、自分が行動・選択するものとして主体的に考えるようになったことである。講義を契機にインターンやアルバイトを始めたり、就職先選びの視点が変わったという声も聞かれるなど、価値観や行動の変容に結びついている。

二点目は、人生は自分ひとりのものでなく、他者との関係のなかで作りあげるものであるという気づきである。例えば、「女性の働き方」という話題も男子学生に関係のない話ではなく、将来のパートナーの生き方として自分にも関わるものにとらえ直し、さらに今後「100歳時代」に向け性別を超え新しい働き方を模索していくことにつながる。そこに「人と協力しながら人生を歩むことへの気づき」が見られたといえる。

三点目は、今の「社会」と「自分の生き方」を引きつけて考えることで、将来、自分たちが生きやすい社会をつくるのは自分たちであるという社会人としての自覚を促すということである。「100歳時代」の社会をリードする意欲と創造性をもつ人材を育てることにつながると我々は期待も込めて感じている。

一方ライフキャリア教育の今後に向けての課題として、まずは教育内容のさらなる改善である。学生たちの関心は高く、さらに発展的に学びたいという声も聞かれている。より応用・専門的な内容を研究との接続も含めて検討していく必要を感じている。

次なる課題は、学内外における普及である。学内では、大学によって制度や状況は異なるであろうが、学部学年を問わず多くの学生に受講してもらうための仕組みが必要である。正課がより望ましいが、幅広い内容を扱うこともあり、学部カリキュラムに位置づけにくく、担当教員の理解・確保も課題となっている。

こうした課題を乗り越え、教育内容を洗練させる意味でも、大学間で連携をし、情報交換を行うことは大切と考えている。単位互換や共同開講なども含めた連携が可能になればより発展をする可能性があるかと期待している。

参考文献

- 1) Gratton, L. & Scott, A., The 100-Year Life: Living and working in an age of longevity (Bloomsbury Information Ltd, 2016)(リンダ・グラットン/アンドリュー・スコット著、池村千秋訳『ライフシフト:100年時代の人生戦略』東洋経済新報社、2016年)
- 2) 全国知事会(2012)女性の活躍の場の拡大による 経済活性化のための提言-M字カーブの解消に向けて
- 3) 神奈川県ライフキャリア教育支援、授業案
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f532110/>